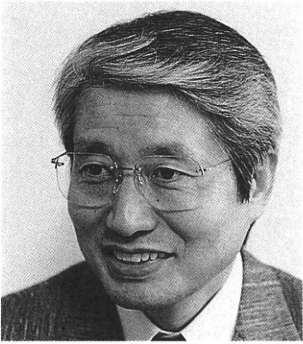


「齶窩形成前カリエス コントロールのためのCritical Path」



日吉歯科診療所 院長

熊谷 崇

■略歴

1968年	日本大学歯学部卒業
1980年	酒田市にて「日吉歯科診療所」開業
1995年～現在	AFFILIATED MEMBER OF THE SCIENTIFIC BOARD I.H.C.F
1995年～現在	新潟大学歯学部非常勤講師
1997年～現在	東北大学歯学部非常勤講師
1998年～現在	九州歯科大学歯学部非常勤講師
1998年～	日本ヘルスケア歯科研究会 科学顧問
1999年～	マルメ大学歯学部(スウェーデン)名誉博士

齶窩形成前齶蝕病変の診断を臨床で生かす歯科医療の実践は可能であろうか。学問的な理論は理解できても、それを臨床で実践するとなると多くの問題に直面する。得られた診断はどの程度確実なのか？予防プログラムはどのくらい有効なのか？患者に満足のゆく結果を請け合うことが本当に可能なのか？信じて実践してもらおう根拠は？などなど。このような疑問に答えを出すためには、信頼できる臨床疫学データが十分にそろっていることが必要である。しかしながら、私たちはそうした信頼できる疫学データをこれまでほとんど持ち合わせていなかった。

歯科臨床の実践を評価するためには、臨床疫学データを評価することが必要である。ただし、現実問題として、診療室に来院する患者のデータには様々なバイアスがかかっており、また対照群の設定もないため、フィールドにおける疫学調査や実験室における実験データとは持っている価値が大きく異なることを理解しなくてはならない。しかし、診療室における臨床疫学データは、臨床における臨床判断の根拠を得るという目的であるならば大きな価値を見いだすことが出来るのではないかと考えている。

わたしはこうした考えに立ち、私の診療室の患者データの分析から、齶窩形成前齶蝕病変の診断によって疾患のプロセスに介入し、発症前にコントロールすることによって健康な歯列を育成するための条件を導こうと試みた。またこの試みは、齶窩形成前齶蝕病変の診断に基づく臨床が、現実的に患者利益となりうることを示すだけでなく、出来るだけ少ない時間、出来るだけ無理のないかたちでの生活への介入への合理的な道筋(critical path)を探る方法としても十分に価値を見いだすことが出来ると考えている。